一般財団法人 沖縄美ら島財団 広報誌

南ぬ風

ふぇーぬかじ

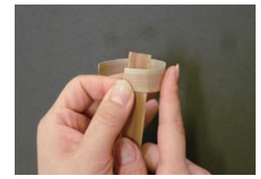
Vol.31
2014.4~6
春号

美ら島 ワクワク工作室

身近な素材を使ったクラフトや工作、昔ながらの手作りおもちゃなどを紹介します。

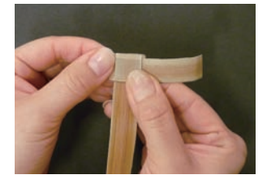
作り方

①長い葉を縦に持ち、前面に短い葉を横に重ねる。



②左に出ている方を後ろ側に折り込み、長い方も後ろへ巻く。

③長い方をぐるっと前にまわす。



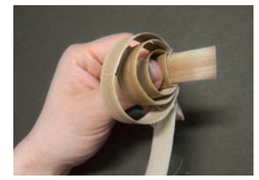
④長い葉の上に出ている部分を手前に折る。

アダン葉でカタツムリ

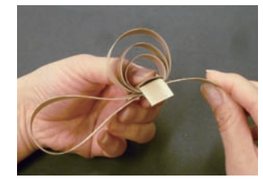
材料 アダン葉（幅1～2cm、長さ40～50cmを1本、10cmを1本）とハサミ

⑤下の長い葉を手前から回し、後ろ側の隙間に通し、きっちりと巻く。

⑥2回目、3回目、4回目と写真のように輪を広げていく。



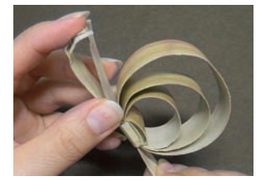
⑦3回輪を作った状態で、カタツムリの殻が完成。



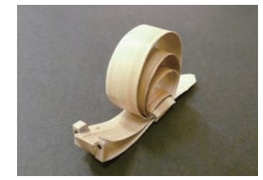
⑧長く残った葉を写真のように手前から逆方向の隙間に通す。

⑨殻の横に出ている部分と、しっぽになる部分を切り整える。

⑩顔と角になる部分を3つに裂く。



⑪顔になる部分を上にし、しっぽをつかんで矢印の方向に押す。



⑫形を整えて、ペンなどで目を描いたら**できあがり**。

沖縄美ら島財団の工作教室に参加してみませんか？

当財団では主にお子様を対象として「美ら島・美ら海こども工作室」や「クラフト作り」等を開催しています。
参加ご希望の方は下記ホームページでイベント情報をチェックしてみてください。

美ら島研究センター
http://okichura.jp/ocrc/event/kousakushitu/

沖縄県立 名護青少年の家
http://www.opnyc.jp/

海洋博公園
http://oki-park.jp/kaiyohaku/

一般財団法人 沖縄美ら島財団広報誌
季刊誌 南ぬ風 春号 vol.31 2014.4～6

編集・発行／ 一般財団法人 沖縄美ら島財団 Okinawa Churashima Foundation

2014年4月発行

〒905-0206 沖縄県国頭郡本部町字石川888 TEL.0980-48-3645 FAX.0980-48-3900

巻頭インタビュー

美ら島をつなぐ 人 Vol.5

作家

池上永一

IKEGAMI EIICHI

色鮮やかな紅型のように、文体が沖縄の風土を表す。最新作は、琉球史のスーパースターが続出した時代の物語。

琉球王国末期を舞台にした小説『テンペスト』が120万部を突破。それまで琉球史に縁のなかった本土の人たちをも取り込み、仲間由紀恵さん主演のドラマ・舞台・映画が話題に。首里城をはじめとする物語の舞台を実際にまわるファンも続出し、図らずも沖縄観光の振興にも貢献した作家・池上永一さん。沖縄を書き続ける作家としての心境と、2013年に刊行された待望の新作『黙示録』についてのエピソードなどを聞いた。

1970(昭和45)年、沖縄県那覇市生まれ、3歳から15歳まで石垣島で育つ。1994(平成6)年、早稲田大学在学中に『バガージマヌパナス』で第6回日本ファンタジーノベル大賞を受賞。2005(平成17)年刊行の『シャングリ・ラ』はテレビアニメ化、2008(平成20)年刊行の『テンペスト』は舞台・映画・テレビドラマ化と大きな話題を集め、累計120万部突破の大ベストセラーとなる。『黙示録』(角川書店)も好評発売中。

contents

美ら島をつなぐ人 …… 02
沖縄のこころ …… 04
美ら島生き物日記 …… 05
調査研究 …… 06
沖縄の希少植物 …… 07
普及啓発 …… 08
御城物語 …… 09
運営管理 …… 10
スポットライトの向こう側 …… 12
沖縄の大木 …… 13
財団いんふぉ …… 14
美ら島ワクワク工作室 …… 裏表紙

作品タイトル「珊瑚の森にすむジュゴン。」

色鮮やかな魚たちが踊る珊瑚の森に現れたジュゴン。鮮やかなジュゴンの姿を海面から爽やかな光が照らす。

表紙イラストについて

与儀 勝之 Masayuki Yogi

琉球イラストレーション作家　那覇市生まれ。

誌名「南ぬ風(ふぇーぬかじ)」とは…

南ぬ風は、梅雨明けとともに南から吹き込んでくる強い風のことです。この南の風によって育まれてきた沖縄の自然や文化をさらに「南ぬ風」に載せ全国に発信していきたいと思います。

首里城でのイベント「中秋の宴」でも見ることができる琉球舞踊。観光客にも人気がある。

ウチナーンチュの感覚で足元を掘り、沖縄を書く作家。

―新作『黙示録』の舞台は、玉城朝薫が組踊を生み出した18世紀前半。朝薫をはじめ、蔡温、徐葆光など琉球史のスターが揃う華やかな時代ですね。

国家戦略として、琉球が自分たち独自のスタイルを生み出さなきゃいけないという時代の要請を受けて、スーパースターが出てきた時代だと思いますよ。御冠船芸能は今の琉球舞踊の礎になっていますし、蔡温の風水によるまちづくりは今もまだ残っている。いい時代だと思うけど、彼らも一人の人間として、理想と現実の狭間で葛藤したでしょう。国家を存続させるためのもてなし、その試行錯誤や楽屋の苦しみは誰にも見えないけれど、生み出す時の苦しみには作家として共感します。組踊は今となっては権威になっているけれど、モノを生み出す時って権威になろうと思って始める人はいない。朝薫も、組踊を見た人の「スゴーイ!面白かったよ!」という反応が、最高のごほうびだったんじゃないかなと思います。

―今度の主人公は男の子ですね。

主人公の了泉は誰も頼りにできない状況の中、自分の踊りひとつで、最下層からトップに成り上がっていきます。神や世間を憎む、それだけの理由が、了泉にはある。親子の情愛とか、こころをえぐられるエピソードもあって、成功も破滅も全部経験して、それでも生きたいと思う人の物語なんです。若い読者には「絶対に上まで行けるよ」という応援歌になると思う。本土の人から見たらよくわからない琉球史の面白さも、物語の一側面です。琉球史を知らない人も、最後は琉球史に興味を持たざるを得ないように、物語の面白さで引っ張っていく自信はありますよ(笑)。

―時代の要請という部分ですが、人は時代から自由に生きることは難しいんですね?

時代からまったく自由になって生きるというのは無理ですよ。その人は生きてないということになっちゃう。一人ひとりの人生は各論を生きているけれど、いろんな人の無意識の総和が、時代のある種の傾向を見せているのだと思います。誰かが号令をかけているわけじゃなくて、なぜか同じ方向に向かっていく。

―池上さんも今という時代の中で、琉球を書いているわけですが…

ウチナーンチュが継続性をもって沖縄を再発見し始めたのは1980年代後半からで、それはウチナーンチュの意識が風土の古層にもぐり始める時期だったと思います。その時代を経て、ある歴史のジャンルとして琉球というものが、自分たちの物語として根を張り始めた。実は僕、ある時期は「沖縄の作家」と呼ばれることに抵抗があったんです。でも今は「沖縄の作家」でいいと思ってる。自分の文体そのものが、紅型のようにコントラストがパキっとしていて、沖縄の風土を表している。どんな場所を書いても熱を帯びて、沖縄の匂いがつきまとう。感覚的なものは、僕はやっぱりウチナーンチュなんだろうなと思います。今後も沖縄を書き続けるつもりですよ。足元を、ずっと深く掘っていくことが自分の人生。自分の書きたいものがどこか遠くにあるなんて、少しも思っていません。

―『黙示録』では18世紀という時代を描く一方で、人のこころの闇を覗き込むような、普遍的なテーマがベースにあるように思います。

対外的なものより、自分の気持ちの中にあるものの得体の知れなさをとことんまで知りたい気持ちはありました。自分の中を知りたいと思うことで破滅する人もいる。でもこころの中の混沌の源みたいなものが、小説が湧き出てくるエネルギーの源であり、書く理由なんじゃないかと思いますね。ずっと小説と向き合っている時は「怖い」という気持ちが強い。カタチにおさまっていない段階のものって、可能性は秘めているけど、破たんする怖さもある。完成させたいけど、大きくあるために遠くへ投げるか、破たんを恐れて小手先でまとめるか、矛盾しているけど悩みます。日々いろんな感情がせめぎあって、時には悲鳴が上がったり、倒れて点滴打ちながらでも、やがてカタチになっていく。ただ、書き続けることに何の疑問もないし、死ぬまで作家をやっていると思う。僕は読者と共にある作家でありたい。偉くならなくていいんです(笑)。

屋部の組踊は質の高さに定評があり、他の地域から見に来る人もいる。

沖縄のこころ Vol.5

地域の伝統・文化を支える人たち

名護市屋部（やぶ）の八月踊（はちがつおど）り

沖縄県内各地に伝わる八月踊り。五穀豊穣と子孫繁栄を願い、地域の神に芸能を奉納する行事だ。中でも名護市屋部では、準備期間を含め約6週間にわたる伝統的な取り組み方を守っていることで知られる。

「旧盆前の面配り（ミンクバイ）で配役を決めて、1カ月間練習します」と語るのは区長の比嘉正則さん。本番の一週間前には向上会（青年会OB）と青年会が道ジュネーのルート上の木々を剪定する（ユチミギリ）。同日、55歳以上のメンバーで構成される有志会は公民館で小道具を修繕する張り方（ハリカタ）を行う。

「旧暦の8月7日が前仕込み（メーズクミ）、8日は敬老会を兼ねた仕組み（スクミ）、10日が八月踊りの本番です。神アサギで御願（ウクイン）をしてから、道ジュネーです。公民館では午後6時頃から芸能が披露されるんですよ。11日に別れ（ワカリ）をして、その一週間後には分散会（ワカリザンカイ）。反省会をして、次の組踊の演目が決められます」

1988（昭和63）年にはこの八月踊りの流れ全体が沖縄県の無形民俗文化財に指定された。八月踊りの出演者は、下は小学生から上は50代まで。彼らに芸を教えるのは師匠と呼ばれる先輩格の人々。世代と時代を越えて脈々と受け継がれた心意気が、この八月踊りを支えているのだ。その輪は屋部の住人でない人にも開かれているという。

「近年は、ムラおこしと地域交流の一環として、名桜大学の学生などの受け入れもしているんですよ」

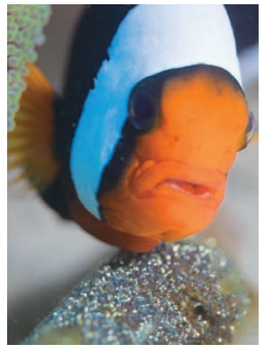
2015（平成27）年には初上演から150周年を迎える屋部の八月踊り。今後も楽しみだ。

①道ジュネーで勇壮に舞う旗頭　②稲摺節（イニシリブシ）は稲作の様子を再現した踊り。道ジュネーでは踊りが、舞台では狂言が披露される　③ちびっ子の旗頭

美ら島 生き物日記 Vol.5

浅い海で暮らすトウアカクマノミ

写真・文
白鳥岳朋（しらとりたけとも）
東京生まれ、沖縄在住の水中＆陸上　全天候型カメラマン。
1988年から水中撮影を開始。
主な著書・写真集に『おさかな接近術』（阪急コミュニケーションズ）、『水中を撮る！』（雷鳥社）など。



貝殻やサンゴの欠片、時には枝や空き缶などにも真っ赤な卵を産みつける（上）。新鮮な水を吹きかけ、雌と雄が孵化するまで交互に世話をする。水温にもよるが、卵は一週間ほどで銀色に輝き（右）、日没後孵化し、稚魚は大海を目指していく。

頭が赤く独創的なトウアカクマノミは、派手でありながらも落ち着いた色彩、そして国内6種のクマノミの中では最も表情があるように思える。可愛らしいだけでなく、気の強さから出る怒った厳しい表情もよい。

彼らは国内の海では希少だ。宿主として共生するイボハタゴイソギンチャクやハタゴイソギンチャクの生息数が少ないというのが理由の一つらしい。

一昨年の夏、名護湾のある狭い範囲内に6つのファミリーを確認した。そのうちの3ペアで産卵を確認したが、旺盛な繁殖力には舌を巻いた。最も精力的なペアでは、2週間に一度、産卵を繰り返したのだ。観察を続けようとした矢先、強い台風二つが近海を通過した。うねりで飛ばされないかと案じ、台風通過後、確認しに行ったところ、全てのファミリーがイソギンチャクごと消えていた。やはり台風かと思いきや、採集だろうという噂が聞こえてきた。だが真相はわからない。

トウアカクマノミの生息地は浅い内海。物理的に人の暮らしに近い。汚染や埋立、そして採集。人間による脅威は否定できない。

沖縄の植物を使って新しい花をつくる

沖縄県には1700種もの多くの植物が自生しています。その中には食用や薬用になったり、また、庭木として植えられたりと、私たちの暮らしに役立つ形で利用されているものもあります。しかし、多くの沖縄の植物については未利用のままです。沖縄の自然は宝の山でまだまだ利用できる可能性を秘めた植物が多く存在します。ここでは当財団が取り組んでいる、沖縄に自生する植物の新しい利用法の開発について紹介します。

園芸植物としての可能性を秘めた沖縄の植物

沖縄の植物には園芸的に利用できる種が存在します。野生のままで使えるものもありますが、新しい花を作る品種改良の素材として優れた特徴をもつものが多くあります。

リュウキュウベンケイは沖縄本島や一部離島にかつて自生していた植物です。今は野生では見られず、栽培下でのみ保存されています。本種は園芸店で見られるカラフルな花を咲かせるカランコエと近い仲間の植物で、互いに交配することができます。リュウキュウベンケイは園芸店のカランコエと異なり、背が高くなる性質を持ちます。互いに交配することにより、リュウキュウベンケイの背が高くなる性質を受け継いだカラフルなカランコエが誕生しました。今まで、カランコエはコンパクトな鉢花としての用途しかありませんでしたが、リュウキュウベンケイとの交配で背が高い品種ができたことにより、切り花としての用途が広がりました。

コウトウシュウカイドウは八重山諸島に生える植物です。園芸店で見られる美しい葉をつける観葉ベゴニアと比較的近い仲間です。コウトウシュウカイドウは一般的な観葉ベゴニアと異なり、夏の暑さに強く、丈夫な性質をもちます。これと美しい葉をもつ原種のベゴニアを交配することにより、性質が強く、美しい葉をつけるベゴニアが誕生しました。この品種は暑い沖縄での栽培も可能です。

この他にも沖縄に生えるナデシコの仲間やランの仲間、キクの仲間にも品種改良の素材として優れた特徴をもつものが存在し、実用性が高い品種の誕生が期待されます。

沖縄に自生するコウトウシュウカイドウ

コウトウシュウカイドウと外国の美しい葉をもつベゴニアを交配して作出された丈夫な観葉ベゴニア。これで完成ではなく、ここから交配を繰り返し、葉の模様や色に変化をつけていく。

和　名：コウトウシュウカイドウ
学　名：*Begonia fenicis*

沖縄の品種の展望

沖縄の植物を使って作出された新しい品種は、沖縄の環境で良く育つ性質も受け継いでいるため、地域性の高い農作物としてブランド化が期待されます。沖縄ブランドとしてはマンゴーや豚などの食用農畜産物が有名ですが、非食用農作物である花卉類の品種を増やすことにより、沖縄ブランド力を強化することができます。

また、新品種を通じて沖縄の植物の素晴らしさを知ってもらうことにより、自然保護活動に繋げることもできます。先にあげたリュウキュウベンケイやコウトウシュウカイドウがなければ切り花向けのカランコエや暑さに強い観葉ベゴニアは誕生しませんでした。

これらの沖縄の植物があったからこそ新しい花が誕生したのです。沖縄の植物の貴重さを知ってもらうことで、自然保護に対する意識を芽生えさせることができると考えられます。

当財団ではこれからも沖縄の貴重な野生植物の保全と、これら野生植物が持つ可能性を引き出し、美しい園芸植物をたくさん作り出していきたいと思います。（佐藤　裕之）

リュウキュウベンケイとカランコエを交配して作出した切り花向けの品種。花色が豊富。「ちゅららシリーズ」として種苗登録申請中。

和　名：リュウキュウベンケイ
学　名：*Kalanchoe integra*

沖縄に自生するリュウキュウベンケイの花

沖縄の希少植物 Vol.20

和　名：ミヤコジマソウ／宮古島草
科　名：キツネノマゴ科
学　名：*Hemigraphis reptans*
レッドデータカテゴリー：
絶滅危惧IA類（沖縄県）、絶滅危惧IA類（環境省）

海岸の崖下の砂地や石灰岩に生える常緑の多年草で、茎が匍匐（ほふく）し節から根を出して広がります。花は朝咲いて昼頃には茶色くしぼんでしまう一日花です。

本種が属するヒロハサギゴケ属は、熱帯を中心に60種ほど分布します。国内で唯一の自生地である宮古諸島は分布の北限です。国外ではフィリピンやニューギニア島、太平洋諸島など広く分布するため世界的には希少な植物ではありませんが、国内では自生地が限られかつ個体数が少なく、自生地の開発や園芸用の採集で絶滅の危機に瀕しています。

和名は宮古島に産することにちなみ、2012年には宮古島市文化財として指定されました。（阿部 篤志）

親子で学ぶ体験型教室

体験学習「魚の歯の秘密を探る」の様子、参加者自身が魚の解剖を行い歯の形状を顕微鏡で観察した

美ら島研究センターでは、亜熱帯性動植物への興味関心を深めていただくことを目的に年間20件程度の各種教室や講演会を開催しています。その中でも「美ら島・美ら海こども工作室」「美ら島自然教室」「美ら海自然教室」は、より分かりやすく、小さなお子様にも自然に興味を持っていただける内容となるよう心掛けています。

「美ら島・美ら海こども工作室」では、小さなお子様連れのご家族でも楽しんでいただけるよう、身近な材料と道具を用いて沖縄の動植物や文化にゆかりのある工作体験を行っています。2013年12月には、沖縄の伝統玩具であるカーブヤー（凧）をアレンジし、沖縄で観察することができる昆虫を描いた「変わりカーブヤー」として工作室を開催しました。教室では、最初に講師が解説を行なった後、実際に工作を行います。カーブヤーの単純構造に見える骨組みや形状にも緻密な力学が隠れていることを講師が説明すると、参加者からは驚きの声が挙がっていました。カーブヤー作りの後は屋外に出て、実際に凧揚げも行いました。

「美ら島自然教室」「美ら海自然教室」では、外部講師の他、海洋生物の飼育や調査研究に携わる当財団職員も講師を務めており、ユニークな着眼点で行われる講義内容は大人の参加者にも好評です。2014年1月に行った「魚の歯の秘密を探る」では、歯の形状を顕微鏡で観察するために参加者自身が魚の解剖を行うなど、体験型の学習が行われました。

この他、沖縄の天然記念物の生態と現状について学ぶ「沖縄の天然記念物シリーズ講演」、サンゴの調査に携わる方を対象とした「サンゴシンポジウム」や「サンゴワークショップ」などを開催し、幅広い世代の方へ学びの場を提供しています。また、今後はこれまでの経験を活かし、地域と連携した事業展開を検討中です。まずは、地域の動植物や自然について学ぶ機会を充実させることで子どもたちの自然に対する興味関心の向上を図るため、美ら島研究センター所在地である本部町や近隣市町村の小中学校と連携した学習会の実施を図りたいと考えています。（前田　好美）

沖縄の昆虫たちをモチーフにしたカーブヤー作りは大人気。子供たちの色鮮やかなカーブヤーたちは元気に空に舞い上がった。

御城物語（うぐしくものがたり）Vol.4

かつて、首里の人々が「御城（うぐしく）」と呼び、敬愛のまなざしで見上げた首里城。首里城とその周辺に関係するトリビアを語る歴史エッセイ。

万国津梁（ばんこくしんりょう）の鐘と首里城

首里城の中に、「首里城正殿の鐘」が置かれているのをご存知でしょうか。

首里城正殿の鐘というのは、別名「万国津梁の鐘」と呼ばれています。むしろ「万国津梁の鐘」の方が有名なのかもしれません。現在、広福門前の広場の片隅に供屋（ともや）という建物があり、その中に万国津梁の鐘の複製が展示されています。この鐘に刻まれた文章は、とても有名でどこかで耳にしたことがある方も多いと思います。「琉球国は南の海の良いところにあり、中国と日本の間にある蓬莱（ほうらい）の島で、船で万国の津梁、いわば架け橋となって貿易を行い、国に宝物が満ちている」と記されています。2000年開催の沖縄サミットの会議場になった万国津梁館は、この鐘から名前をとっています。

じつはこの鐘、首里城正殿に掛かっていた鐘でした。なぜ正殿に鐘があったのか？想像しがたいと思いますが、万国津梁の鐘が造られた1458年、約550年前の正殿は、屋根に現在の様な瓦は無く、板葺きでした。その後、正殿は何度も火事で焼け、再建されました。屋根に赤い瓦が葺かれたのは18世紀、約300年前の建物からです。現在見ることのできる首里城もこの300～200年前の時代設定で門や建物を復元しています。万国津梁の鐘が掛かっていた550年前の首里城とはだいぶ雰囲気が異なっていました。そのため万国津梁の鐘は、現在正殿に掛けずに広福門の広場の供屋で展示しています。

首里城正殿が板葺きだったなんて、とても驚きですね。ぜひ首里城を見学した際に、現在の赤瓦の首里城正殿と異なる首里城にも思いを馳せてみてはいかがでしょうか。（幸喜　淳）

広福門前の広場の片隅にある供屋
この中に万国津梁の鐘の複製が展示されている

左：首里城正殿の鐘（万国津梁の鐘：複製）　下：銘文

おきなわ郷土村

文化体験やイベントを通して、沖縄のこころを伝える おきなわ郷土村。

人気イベント「黒糖作り体験」のひとコマ。本来なら牛が押してサトウキビを圧搾する「サーターグルマ」を、みんなで力を合わせて回す。

昔の民家でくつろぐ、遊ぶ。地域の協力で沖縄の魅力を発信。

海洋博公園の一角を占めるおきなわ郷土村。琉球王国時代の集落を模したエリアで、御嶽、神アサギ、拝所を中心に、さまざまなタイプの民家や高倉などを再現している。また、王府が編纂した古謡集である『おもろさうし』にちなんだ植物を集めた「おもろ植物園」も併設。

「地頭代（じとうで）の家」と呼ばれる民家は、琉球王国時代に地方行政を担っていた代官の住宅を模して建てられたもの。沖縄の典型的な古民家の様式を守っている。平成18年度からは、地元の民踊サークル本部（月～木）・本部町民踊愛好会（金～日）のメンバーが交代制で常駐。三線や踊り、お手玉などの無料体験を行ない、地元産の黒糖とお茶を無料でふるまう憩いの場だ。そんな郷土村で「看板娘」を担う民踊サークル本部の仲程房子さんはこう語る。

「私たちは、自称『お茶出しばあさん』（笑）。お客さんにゆっくりくつろいでもらいながらユンタクもしています。混雑している沖縄美ら海水族館に比べたら、ここは静かでいいねとおっしゃる方が多いですよ。海洋博公園の穴場です（笑）。本土から『また来たよ』と何度も来てくれる方や、一緒に撮影した記念写真を送ってくれる方もいらっしゃるんですよ」

アンケートには「おばあと話せてよかった」「こんな所があるとは知らなかったけど、ゆっくりできて良かった」という声が多数寄せられており、回答の9割が満足度に高得点をつけているという。仲程さんをはじめ、おばあと呼ぶにはまだ若い皆さんの人気とパワーは絶大だ。

「おきなわ郷土村では、学問的な裏付けも考えながら、ご来場されたお客さまに沖縄の文化を理解していただくという教育普及的な役割にも取り組んでいます」

と語るのは、郷土村を担当する国営公園管理部 企画運営管理チーム兒玉絵里子主事。おきなわ郷土村の運営管理としては、建物など施設の整備、日常的な顧客サービス、沖縄文化を発信するイベントの企画・運営などがある。

「おきなわ郷土村には、沖縄の生活文化に興味のあるお客さまが多いのが特徴です。地域の皆さんにご協力いただきながら、地元密着の観光を提供して、思い出に残る旅になるようにと考えています。ただ建物を見てもらうだけでなく、そこに人が加わることでお客様一人ひとりに合ったものが提供できる。つまり、沖縄のこころを発信する部分に重きを置いているんです。修学旅行など団体客の受け入れもしています。そして、生きた知識として沖縄の文化を理解してもらうために、イベントも実施しているんですよ」

現在、お正月には琉球衣装の試着ができる琉装体験、ゴールデンウィークと夏休みには沖縄の伝統玩具作り体験、冬場にはムーチー（伝統的な蒸し餅）や黒糖を作るイベントも。いずれも人気で、問い合わせも多いという。

2014年2月に開催された黒糖づくり体験は、予約開始後数日で40名の定員がいっぱいに。親子連れから長期滞在中のシニア世代まで、さまざまな世代の方がサトウキビの収穫から圧搾、煮詰める作業、固めてカットして試食という工程を童心に返って楽しんでいた。

「もっと郷土村の来場者数が増えるように新しいプログラムを開発したり、沖縄をより深く知っていただけるような、文化・風習に特化したイベントも実施できたらいいなと思っています」

海洋博公園内で静かな人気スポットとなっているおきなわ郷土村に、今後も注目したい。

与那国の民家のヒンプンを修繕。木造建築の軽微なメンテナンスは財団スタッフで行う。

1：初めて三線に触れる人も「おばあ」たちの指導で「てぃんさぐぬ花」が弾けるようになる。 2：琉球古民家について説明をする仲程房子さん。 3：おきなわ郷土村担当の兒玉絵里子主事。 4：縁側に腰かけ、お茶を飲んで休むだけのお客様も多い。

5：園内に植えてあるサトウキビを収穫。 6：大きな鍋でグツグツと煮て水分を飛ばす。 7：沸騰前に食用の石灰を入れ、PHを調整。アクが出てくるので取り除く。 8：砂糖液のトロミが粘りに変わったら鍋からトレイに移す。この見極めが大事！

スポットライトの向「こう」側 Vol.5

植物研究家

伊波 善勇（いは ぜんゆう）

『沖縄大百科事典』（沖縄タイムス社）に、380もの植物の線画を提供し、『沖縄の自然5 熱帯花木』（新星図書）、『沖縄植物図鑑』（当財団発行）など沖縄の植物に関する著書も多数ある伊波善勇さん。長年、沖縄県内の中学校・高等学校で生物の教員として教壇に立って来られたが、1999年に退職。以後は切り花の生産農家としてランなどを栽培される一方で、自身の研究活動と教育普及活動にも積極的に取り組まれている。毎年、夏休みに海洋博公園で開催する「植物観察と標本作り教室」の名物講師でもあり、伊波さん目当てに毎年受講するリピーターも。沖縄の植物研究の第一人者かつ生き字引とも言える伊波さんに話を聞いた。

―伊波さんが植物の研究を続けてこられた動機は何ですか？

伊波「高校時代は生物クラブの部長をして、琉球大学の生物学科では植物を専攻しました。卒業して教員になってからも研究は続けていました。初島住彦氏の1971年発行『琉球植物誌』は、写真や絵が少なかった。もっと図や写真のある図鑑を作りたいという思いがあり研究は続けました。『元琉球大学教授（現沖縄美ら島財団参与）の西平守孝氏に「キミのは図じゃない、絵だ」と指摘されたのを機に、※デバイダーで葉と葉の間隔も測りながら、本格的に線画を描き始めました。これまでに2000枚は描きましたよ」

―地道な調査を続けてこられた結果、新分布種の発見もされましたね。

伊波「新分布種を発見した時はうれしくてね、すぐカチャーシーを踊りました（笑）。僕はね、他の研究者に比べて秀でたところはないが、続けるのがうまい（笑）。だから植物図鑑の仕事もできた」

―海洋博公園の夏休みイベント「植物観察と標本作り教室」は大人気で、「伊波先生に習いたい」と毎年受講するリピーターの親子もいるそうですね。

伊波「1991年からだから、もう20年以上続けていますね。子どもには、わかりやすく説明するのが大切です。以前は八重岳へ行って、植物を採集して、湧き水で洗って標本を作っていました。山には何があるか、なぜ湧き水が澄んでキレイなのか、こんな話もしながらね。今は海洋博公園内の植物を使って標本を作っています。他に、自分で採集したものがあったら、持ってきてと言っています」

―『伊波先生の説明はわかりやすくて面白い』という声は多いそうですが。

伊波「僕は標本の歴史からわかりやすく説明します。植物の標本はきちんと作れば何百年ももつ。大英帝国時代の標本も、200年以上経ってもなお現存するんです。だから小学生には、『キミたちの標本も1年で終わるんじゃないよ、来年も来なさい』と言うんです。今、小学校の授業でも植物の標本作りなんか教えません。これは実に残念なことですね。植物の標本は自然の勉強、特に形態的なものを学ぶにはいい教材なんです」

―自然環境も変化していますから、長い目で見れば今あるものを標本にしておくことも大切なんですね。

伊波「山だって、いつなくなるかわかりません。1962年、砂糖が高騰したために沖縄では山という山にブルドーザーが入れられてサトウキビ畑になった。おかげで自然環境も大きく変わりました。自然を開発する時には前後を考えないといけないんだが、なかなかそうはいかない。外来種の問題にしてもそうです。1972年には約2500種の植物があったという調査結果がありますが、2014年はこれが約5400種にまで増えた。沖縄の場合は米軍による種子の持ち込みが無意識にあって、帰化植物が年々増えています」

―そんなに増えているんですか。

伊波「小学生も4年生になれば気候の話もある程度理解できる。世界地図を見せて、だいたい同緯度の亜熱帯性気候の中で、沖縄だけが海洋性で、あとは砂漠だという話もします。いかに沖縄の自然が貴重なものか、子どもも理解できる。こういう学習を通して、子どもたちも植物を学んでみようという気持ちになるんです。標本教室で勉強した子が、夏休みの自由研究で県のトップ賞を取ったのはうれしかったですね」

自宅の書斎には膨大な標本を収蔵しておく保管庫がある。

標本から起こす線画は緻密そのもの。細部まで丁寧に描かれる。

※デバイダーとは製図用具の一種で、開閉できる二本の脚の先が針状になっているもの。寸法の写しとりなどに用いる分割器。

沖縄の大木

＜和名＞
シマグワ
＜科名＞
クワ科
（学名：*Morus australis*）
Vol.23

シマグワは九州南部以南、東南アジアに分布する落葉中高木です。低地林内に多く自生しており木は雌雄異株です。開花期は3月～10月で実は4月～11月頃に熟します。沖縄の方言では一般的にクゎーギと呼ばれています。また暴風後毎回結実するとも言われ、石垣では方言でネナーズ（7回結実するという意味）と呼ばれています。樹皮は製紙原料、実は食用、葉は養蚕用、材は家具材として利用されます。

沖縄県大宜味村の上原（うえばる）区には高さが約11m、幹周り約2m40cm、枝の幅約13m、樹齢推定100年のシマグワがあります。上原区のほぼ中心にそびえ立つシマグワについて地域の方によると「戦前は、屋敷がありその中にあったが、戦時中その屋敷の防風林はほぼ焼かれてしまったがこの木は残った。幼い頃はこの木に実がつくとよく採って食べていた」ということでした。木が成長して人間の手が届かなくなった現在でもたくさんの実を付け、鳥達の餌になっているようです。現在も新芽が確認でき、太く長い根が畑の中をはっていて100年の古木とは思えないほど生き生きとそこにたたずんでいました。

2003年には「沖縄の名木百選」（沖縄県森林緑地課）にも選ばれています。上原区ではこのシマグワを大切にしていて周囲を柵で囲い、根の保護をするとともに、年に2回、草刈や清掃を行い地域の宝として大切に守り育てられています。（平良 洋子）

沖縄美ら海水族館アンテナショップ「うみちゅらら」まもなくオープン

２０１３年より、沖縄美ら海水族館のＰＲ強化に向けた取り組みの一環として、県外で沖縄特産品の販売を行っている㈱沖縄物産企業連合（沖縄宝島）や㈱沖縄県物産公社（わしたショップ）と提携し、店舗内にＰＲブースを設置しています。ＰＲブースではジンベエザメやナンヨウマンタがダイナミックに泳ぐ黒潮の海の映像を流すモニターをはじめとして、リーフレットの配布により沖縄美ら海水族館や海洋博公園の情報提供を行っています。また、ブース内で沖縄美ら海水族館オリジナルグッズの販売を行い、ファンの獲得も目指しています。現在、沖縄宝島３店舗（新宿京王百貨店、ららぽーと横浜店、ぽっぽ町田店）、わしたショップ３店舗（銀座店、イオンレイクタウン店、イオンモール幕張新都心店）の合計６か所で展開しておりますので、近くにお寄りの際には是非お立寄り下さい。

また、２０１４年４月末には那覇市の国際通りに沖縄美ら海水族館のアンテナショップ「うみちゅらら」をオープンします。アンテナショップの中には沖縄美ら海水族館の情報ブースやオリジナルグッズが購入できるコーナーの他、大画面のシアターを設置し、来店して下さった方に沖縄美ら海水族館や海洋博公園の魅力を伝えることで誘客促進を期待しています。さらに、フロア内にはやんばるコーナーを設け、沖縄県北部の市町村と連携して観光情報の発信や特産品の販売を行います。

ＰＲブースおよびアンテナショップは海洋博公園外での物販活動を交えたＰＲ事業であり、財団としては初の試みになります。商品は人を引き付ける魅力があり、それを手にした人はファンになり、リピーターの増加にもつながります。沖縄美ら海水族館を起点としたやんばる観光の提案も積極的に行い、北部地域の振興に寄与する事を期待しています。

国際通りにオープンする美ら海水族館アンテナショップのイメージ。

各店内に設置しているPRブース。

首里城公園「黄金御殿・寄満・近習詰所、奥書院」開館／「百人御物参」初開催

２０１４年１月24日、首里城正殿裏側に「黄金御殿」「寄満」「近習詰所」「奥書院」の施設が新たに開館しました。これらの施設は、首里城の行政（正殿・北殿・南殿）、祭祀（京の内）、生活・儀礼（御内原）の３空間の一つ、生活・儀礼空間になります。

黄金御殿は、２階には国王や王妃・王母の居室があり、１階には左掖門（俗称：暗シン御門）があり、御庭から御内原に抜ける通路となっていました。寄満は、国王やその家族の食事を準備した建物でした。近習詰所は、約20名あまりの役人が詰めていた場所で、奥書院は国王が執務の合間に休憩した場所でした。

首里城公園では、この施設開館を記念して２０１４年１月25日・26日の２日間に琉球王国時代に首里城を中心に執り行われていた祭祀儀式「百人御物参」を開催致しました。

百人御物参とは、琉球王国の祭祀儀式を司る神女と琉球王府の役人が、首里城やその周辺にある聖域や御嶽をお参りする行事のことで、類似の行事を含めると年間で６回程度行われていました。開催当日、御庭と御内原を結ぶ左掖門から登場してきた神女達は、下之御庭にある首里森御嶽をはじめ、京の内にある４か所の御嶽を巡拝しました。

首里城の祭祀世界の素晴らしさを体感することのできるイベントとして、県内外の来園者にも高い評価を頂きました。

首里城公園では、今後も沖縄の歴史・文化の拠点として多様な活用を図るとともに、魅力あふれる施設運営や再現儀式を実施することで、さらなる利用促進や利用満足度の向上に努めていきたいと思います。

ジンベエジェット2号機、就航!!

日本トランスオーシャン航空㈱（ＪＴＡ）と沖縄美ら海水族館のタイアップ特別塗装機 第２弾「さくら ジンベエ」が２０１４年１月５日より就航しています。

タイアップ第１弾は２０１２年の12月。沖縄美ら海水族館の人気者、ジンベエザメの「ジンタ」をイメージし塗装した１号機を就航しました。今回の２号機は、ジンベエザメのデザインはそのままに、女の子をイメージしたさくら色の可愛らしい塗装を施し、沖縄・やんばるの「カンヒザクラ」を機首部分に飾りました。

今後は、ゆうゆうと空を泳ぎまわる２機の「ジンベエジェット」を活用したツアー商品の造成も計画されており、沖縄・北部地域への誘客・観光振興に貢献していきます。

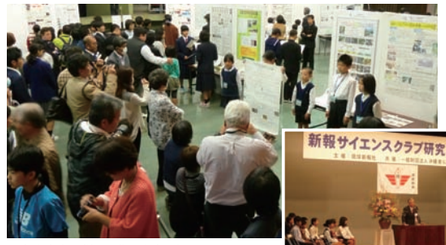
さくら色の鮮やかな機体は青い空に映えます。

新報サイエンスクラブ研究発表会

琉球新報社主催事業「新報サイエンスクラブ」は、県内の小中学生を対象に、沖縄の自然や動植物に関する研究の支援を行うことで「科学の芽」を育むことを目的としています。

平成25年度は、研究者28組が選出され、２０１３年７月より活動を開始しました。約半年間の研究期間の後、２０１４年１月25日に開催された「新報サイエンスクラブ研究発表会」において、成果発表を行いました。研究者の方々は、類似する研究や興味を持った研究の発表へも積極的に参加し、意見交換が活発に行われていることが伺えました。

参加者からは「新しく感じた疑問について、来年も調査したい」という声も聞かれ、継続した活動が期待されました。



研究発表会の様子。成果発表とあわせて類似研究者との意見交換も活発でした。

第1回名護青少年の家まつり開催！

名護青少年の家をもっと皆さんに知っていただこうと２０１４年１月25日、満開のカンヒザクラが咲き誇る中「第１回名護青少年の家まつり」を開催しました。名護市のみならず、県内外から約３５０人の方が来所し、様々なアクティビティを通して名護岳の自然に親しみました。

沖縄美ら島財団芸能部による地謡と琉舞「四ツ竹」の披露で華々しく祭りはスタートし、クラフト体験やハイキングコースウォークラリー、ネイチャーゲーム等、名護岳の自然を感じられるアクティビティのほか、日本宇宙少年団名護分団による「ロケットの打ち上げ式」もあり、大変盛り上がりました。このほか大浴場も無料開放し大好評を得ました。

街の喧騒を離れ、非日常のゆったりとした時間の中で、サクラや名護岳の自然をじっくりと味わうことができたのではないかと思います。来年も開催を予定していますのでご期待下さい。

ロケット打ち上げ式に興味津々の子どもたち。

名護岳の自然を活かしたネイチャーゲームも大好評。